

『三国志演義』は、後漢末の争乱を背景に、英雄豪傑が自分の力量のままに血沸き肉躍る活躍をする物語です。当時、腕や才能に覚えのある者にとって、自分の力を思う存分發揮できる舞台が用意されたのです。趙翼ちやうよくが指摘したように、この時代ほど、多くの人才がその才能を發揮して活躍した時代はなかったでしょう(『二十二史劄記』にじゅうにしにさつぎ)。しかし一般庶民にとっては、これほど犠牲を強いられた時代もありません。

魯迅ろしんは中国の歴史を、「奴隸になりたくてもなれない時代」と「しばらく安全に奴隸でいられる時代」の二つの時代に分けましたが(『灯火漫筆』とうかまんひつ 竹内好訳)。『魯迅文集』所収、筑摩書房)、民衆にとつては「奴隸になりたくてもなれない時代」が、この戦乱の時代でした。

その時代の循環を、『三国志演義』は「天下の大勢は、統一が長ければ必ず分裂し、分裂が長ければ必ず統一される」という言葉であらわします。すべてを押し流していく無常の歴史です。

魯迅は、この繰り返し返しの歴史に終止符を打ち「中国の歴史にかつてなかったこの第三の時代を創造すること、それが今日の青年の使命である」(前掲書)、と民衆が主役となる時代の

建設を青年に託しています。民衆が真の主役となる時代を、との魯迅の叫びです。

ここで、三国時代以降の歴史に少し触れて、終わりたいと思います。

後漢末から三国の争乱の時代が終わると、平和な気分が溢れます。晋の統一で天下泰平、めでたしめでたしとなればよかったです、しかし、そうはなりませんでした。

中国は日本とは違い、国内の統一がなされても広大なアジア大陸が地続きで拡がっていません。これが島国の日本と決定的に違うところです。漢の劉邦は楚の項羽を破って秦末の戦乱に終止符をうちますが、その後モンゴル高原の遊牧騎馬民族である匈奴と戦って大敗を喫し、漢はひたすら匈奴に低姿勢をとって和平を維持しました。常に周辺地域からの脅威にさらされています。

三国時代の後も、晋の統一は約五十年で崩れ、北中国は北方遊牧民族が分立する五胡十六国の大混乱時代に突入します。漢民族の王朝は南に遷り、七世紀初めの唐による統一まで、南北朝の争乱の時代が続きます。まさに、分裂と統一の循環の歴史です。